

平成28年5月19日(木)

老球の細道236

自己主張とチームワーク

会津バスケットボール協会 室井 富仁

先日、日本の演劇界の第1線疾走し続けた蜷川幸雄さんが亡くなった。彼はあまり売れない俳優兼演出家だった頃自分の才能に自信が持てなかったため、住んでいた団地の玄関先に「蜷川TENSAI(天才)」という表札を掲げて自分自身を追い込んだそうだ。「天才」の看板をあげれば、さぼるわけにいかず、背水の陣をしいてがんばったという。

現在バスケットボール界では色々な年齢カテゴリーや色々な地区で選抜チームの練習会や試合が企画されている。優勝チームでなくても能力のある選手はたくさんいる。そのような埋もれたダイヤモンドの原石を探すのが目的で、最終的には日本代表に終結させる。

しかし選抜チームの練習となると、1位のチームから選ばれてきた選手達ばかりが元気で、その他のチームから選ばれて来た選手達は借り物猫のようにおとなしく参加するケースが多い。声も出ない、シュートもしない。このような選手をコーチングスタッフはゲームで使わない。自チームではエースとして君臨している選手がゲームで使われないと誤ったプライドが傷つけられ、徐々にふてくされるようになりチームの雰囲気をおこす。

サッカー日本代表・長谷部誠選手はある新聞で「代表とは競争する場だ。だがチームワークが絶対」という見出しで下記のようなことを言っていた。

【新しい選手が入ってくることは、日本代表にとって絶対に必要なことだと思う。新しい選手が、今いる選手を追い越していけば、チーム力は上がる。日本代表とは競争する場だ。ただ、今の日本代表がW杯で世界の強豪国と戦うベースになっているのはチームワーク。

先発で試合に出る機会が少ない選手の態度や行動は注目されることは少ない。でも、彼らはそれぞれの所属チームでは中心選手で常に試合に出ている。試合に出たいと思う気持ちは間違いなく強い。練習では激しくプレーするし、レギュラーを取ってやるという気持ちは感じる。ただ、その結果、試合に出られなかったとしても、ふてくされた態度を取ったりはしない。今の日本代表の強さのなかで、このようなことが1番目か2番目に大事な要素だと思う。

初めて日本代表に選ばれてから7年たった。試合に出てない選手が非協力的だとチームの雰囲気は悪くなるが、今のチームはそういうところがない。試合に出ている人も、出ていない人も協力して、お互いの力を引き出しあう。(中略)。日本代表におとなしい選手はいない。みんなピッチの上で主張する。でもチームワークは尊重する】

ドイツの哲学者ニーチェは「わがライバルこそ最高の友である」と言っている。ライバルとの競争こそ自分のパフォーマンスを最高に高めてくれる絶好のチャンスである。そのようなライバルが同じチームにひしめき合っているのが選抜チーム、代表チームである。そしてそのライバルたちが固いチームワークで結ばれていたなら「鬼に金棒」「室井に英会話」。「自己主張」と「チームワーク」、更なる高みに導く大切なキーワードである。

蛇足：周りが皆強く見えたり、偉く見えたりした時こそ自分を前面に出すべきである。遠慮していたり、引っ込んでいる余裕はない。熱意、誠意、創意、室意。「俺は室井だ！文句あつか！」。出る杭は打たれるが出過ぎた杭は打ちようがない。引っ込んでいる杭は腐ってしまい悔い(杭)が残る。